校長室だより～燦燦～ №６１５

# 肩の荷

2022.8.31

「肩の荷」とは、精神的な負担になるようなことや心のつっかえなどのことを意味する言葉である。「肩の荷が下りた」などとよく使われる。

今まで肩の荷が下りたことなどあっただろうか。８月７日（日）だった。朝、起きると、明らかに今までと違った。何かすうっと軽くなっていた。ああ、これが肩の荷が下りるということかと実感した。一日中リラックスできたのである。珍しいことである。

８月５日（金）・６日（土）の２日間にわたり、コラッセふくしまを会場に、ハイブリッド型のオンラインによる会が催された。第４９回全国海外子女教育国際理解教育研究大会・第８回東北ブロック海外子女教育国際理解教育研究大会である。

福島県国際理解教育研究会という組織がある。同様の組織が全国の都道府県にある。その東北大会を兼ねた全国大会が福島で開催された。私は、自分が会長になれば、福島での全国大会を会長として迎えることを理解した上で会長となった。さすがに、何でもはい、はいと引き受けるタイプの私でも気が進まなかった。できれば避けたかった。だが、行きがかり上、そうなってしまった。

昨年の全国大会は富山だったが、オンラインだった。富山には、全国事務局の役員を含め他県の人は誰も行かなかった。私もオンラインで参加した。今年の福島大会は、全国事務局の役員の方々が１０名ほど福島に来てくださり、我々とともに運営に携わった。

会長と言っても会の中で何度か挨拶をしたり役員さんとお話をしたり、何かと気を使ったりするだけである。だが、長がつくだけで本人が意識しないところで、肩の荷になっていたようである。確かに、７月２４日（日）の中体連県大会ソフトテニス競技が終了しても、ほっとはしたが、肩の荷は下りなかった。きっとこの全国大会を控えていたからだろう。

似たようなことは今ままでもあった。高校に勤務していたときである。ちょうどその高校が百周年を迎えるタイミングだった。１１月上旬に百周年記念式典があった。県知事様、県教育長様をはじめ来賓の方々のご出席のもと、何とか無事に終了できた。あのときは、肩の荷が下りたというよりは、「さあ、これでようやく新しいことができる」という感覚だった。それだけ、終わるまではそのことに集中していたということであろう。

８月７日（日）は肩が軽かった。今までは経験したことがない感覚だった。当たり前である。これまでは、そんな重い責任の立場、重荷を背負ったことなどなかったのである。肩の荷とは、荷を下ろしてみないと、それが荷だったとは気づかないのかもしれない。自分ではそうは思っていなくても肩の荷になっていることがある。知らず知らずのうちにプレッシャーになっていることがある。

全国大会が終わったからといって、すべての肩の荷が下りたわけではない。教員として生きていく以上、ずっと肩の荷は下りないのだろう。肩の荷は、たまに少しだけ下ろすからいいのかもしれない。